

中心部震災メモリアル拠点の 検討状況

令和元(2019)年8月3日

中心部震災メモリアル拠点検討委員会

これまでの経過

平成23(2011)年3月11日

東日本大震災発生

平成26(2014)年12月

仙台市震災復興メモリアル等検討委員会が仙台市に提言

平成27(2015)年12月

地下鉄荒井駅舎内に「せんだい3.11メモリアル交流館」が開館

(地下鉄東西線開業の12月6日に一部先行開館、翌年2月13日に全館開館)

平成29(2017)年4月

「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」が開館

平成31(2019)年1月

中心部震災メモリアル拠点検討委員会が発足

令和元(2019)年8月

震災遺構 仙台市荒浜地区住宅基礎を公開

仙台市震災復興メモリアル等検討委員会の提言と取組状況 (1/3)

1 震災復興メモリアルに込める願い

時を経て 世代が替わっても 災害から命を守るために
 仙台市民一人ひとりが 東日本大震災の記憶と経験を
 未来へ 世界へ つなぐ

【震災復興メモリアルに込める願い】
 東日本大震災の記憶と経験を 未来へ 世界へ つなぐ



2 6つの取り組みの方向性

① 地域資源を引き継ぐ

※ 各団体が取り組むメモリアル関連事業の一部を抜粋し、掲載しています

取り組み	取り組みの方向性
東部地域における みどりの再生	市民の手で植え育てる仕組みづくり
	みどりへの多様な関わり方の創出
貞山運河の再生と利活用	歴史や文化、豊かな自然環境を伝える
	多様な参加の仕組みづくり

主な関連事業 ※
<ul style="list-style-type: none"> ふるさとの杜再生プロジェクト：仙台ふるさとの杜再生プロジェクト連絡会議
<ul style="list-style-type: none"> 居久根の保全・再生：市民、民間団体、仙台市 農業園芸センターの再整備：仙台市、民間事業者
<ul style="list-style-type: none"> 貞山運河に関する情報発信等：貞山運河研究所 荒浜灯籠流し：同実行委員会
<ul style="list-style-type: none"> 海岸公園再整備：仙台市 みんなの橋（仙台インプログレス）：せんだいメディアテーク

【上記の他、「地域資源を引き継ぐ」事業】

- ・ふかぬまビーチフェスタ：仙台市
- ・RE:プロジェクト：仙台市
- ・3.11オモイデツアー：3.11オモイデアーカイブ

仙台市震災復興メモリアル等検討委員会の提言と取組状況 (2/3)

②記憶と経験を形にする

※ 各団体が取り組むメモリアル関連事業の一部を抜粋し、掲載しています

取り組み	取り組みの方向性	主な関連事業 ※
モノUMENTと遺構による記憶の継承	犠牲者や被災地域を悼む場やモノUMENTの整備	<ul style="list-style-type: none"> ・地域モノUMENT整備：仙台市 ・震災遺構整備：仙台市
	津波の脅威を実感できる遺構の保存	
市民力によるアーカイブの整備と利活用	市民一人ひとりの想いを含めたアーカイブの整備	<ul style="list-style-type: none"> ・震災復興記録誌の編さん：仙台市 ・3がつ11にちをわすれないためにセンター：仙台市、せんだいメディアテーク ・みちのく震録伝：東北大学 ・仙台市のアーカイブ拠点（検討中）：仙台市 ・NHK仙台放送局メディアステーション：NHK ・市民センターや文化センターにおける朗読やミュージカルによる伝承活動：仙台市 ・書籍「震災学」の発行：東北学院大学
	震災の経験を伝え続けるための拠点整備	
	さまざまな手法での伝え方	

【上記の他、「記憶と経験を形にする」事業】

- ・プラネタリウム特別番組「星空とともに」：仙台市天文台
- ・海岸公園冒険広場における発信：仙台市、冒険あそび場－せんだい・みやぎネットワーク

③明日へ向かう力を育てる

取り組み	取り組みの方向性	主な関連事業 ※
文化・芸術の力を復興と記憶の継承に生かす	文化・芸術による取り組みの推進	<ul style="list-style-type: none"> ・復興コンサート：仙台市、音楽の力による復興センター・東北 ・仙台市文化プログラム：仙台市、仙台市市民文化事業団 ・3.11文学館からのメッセージ：仙台文学館など全国の文学館 ・音楽ホール（検討中）：仙台市
	文化・芸術による取り組みを将来につなげるための拠点整備	
知り学ぶ機会をつくる	自然現象や災害を知り学べる環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・せんだい3.11メモリアル交流館企画展（フィールドワーク）：仙台市 ・311『伝える／備える』次世代塾：報道機関、大学、企業、仙台市 ・復興大学復興人材育成教育：学都仙台コンソーシアム ・仙台市追悼式典：仙台市 ・キャンドルナイト：3.11キャンドルナイト実行委員会 ・HOPE FOR project：同実行委員会
	人材の育成	
	3月11日の過ごし方	

【上記の他、「明日へ向かう力を育てる」事業】

- ・七夕の折り鶴（故郷復興プロジェクト）：仙台市教育委員会
- ・仙台版防災教育：仙台市教育委員会
- ・今できることプロジェクト：河北新報社

仙台市震災復興メモリアル等検討委員会の提言と取組状況 (3/3)

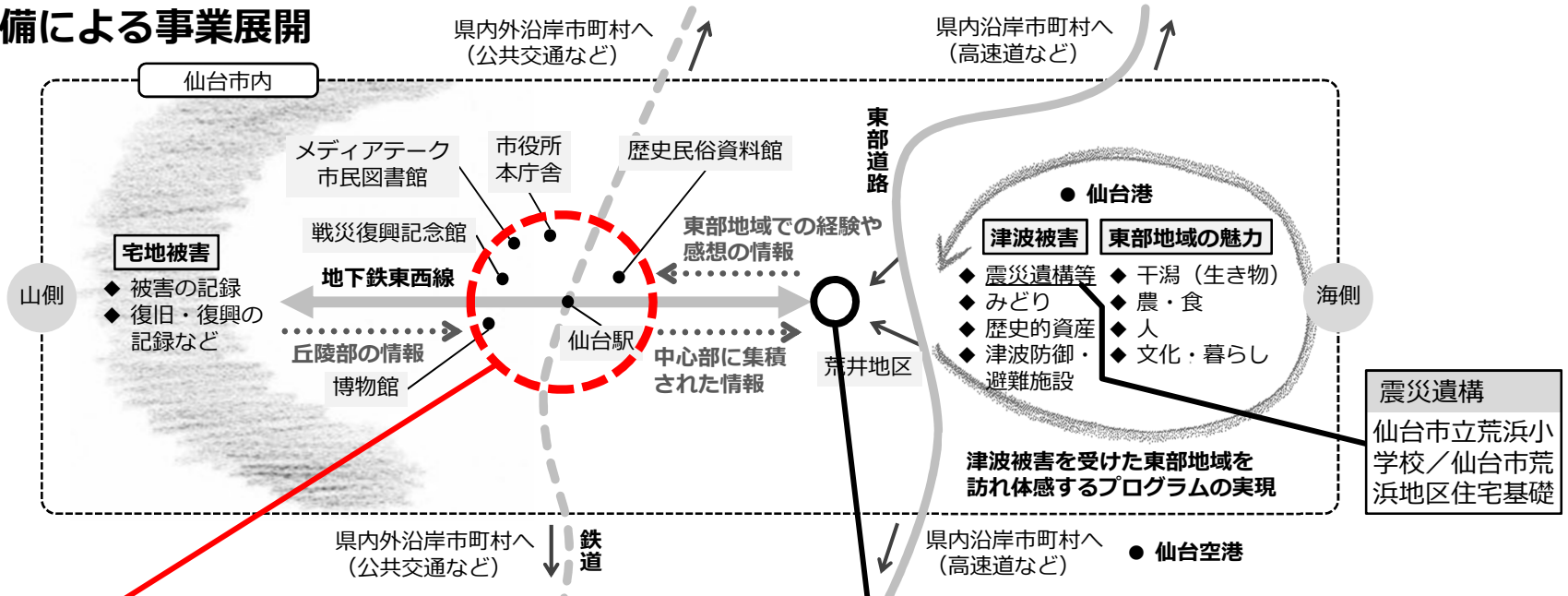
3 組織設置と協働による事業推進

項目	取り組み
事業推進に必要とされること	組織の設置
	多様な主体との協働
事業推進における留意点	多様性と変化への対応
	経験をつなぐ手法を生み出す

※ 各団体が取り組むメモリアル関連事業の一部を抜粋し、掲載しています

主な関連事業 ※
(今後の課題)
・ せんだい3.11メモリアル交流館における協力事業
・ 前記事業（一部掲載）の他、様々な事業を多様な主体との協働により展開
(今後の課題)
(今後の課題)

4 拠点整備による事業展開



中心部の拠点 (丘陵部の情報含む)

位置付け：①東北、宮城の玄関口 / ②3.11を収集・編集・発信する拠点

役割：市民一人ひとりの震災体験、津波被災・宅地被災の状況、長期化した不自由な生活の様子など、そこに込められた想いも含め収集・編集し、発信する拠点

機能：①震災の記憶と経験の収集・編集の継続
②市民が震災を語る場
③東日本大震災の全体像がわかる展示

沿岸部の拠点：せんだい3.11メモリアル交流館

位置付け：①宮城、仙台東部地域への玄関口
②3.11を知り学ぶ拠点

役割：津波被害を受けた現地を訪れ、震災の記憶と経験を知り学ぶ沿岸部回遊の出発点

機能：①東部地域の回遊に必要な情報の展示
②フィールドワーク活動のプログラムづくり
③人の想いも含めた伝え方につながる活用



せんだい3.11メモリアル交流館

Sendai 3/11 Memorial Community Center

位置付け

「東日本大震災を知り学ぶための場」であり、津波で大きな被害を受けた「東部沿岸地域への玄関口」の役割も果たす沿岸部のメモリアル拠点。
平成27(2015)年12月6日に一部先行開館し、翌年2月13日に全館開館。



1階 交流スペース

機能

- 1階 交流スペース：津波浸水区域等を表示する立体地図やスライド、図書コーナーなど、東部沿岸地域の情報を発信。地域の交流やイベントにも利用
- 2階 展示室：震災の被害や復旧・復興状況などを伝える常設展と、様々な切り口で震災を伝えていく企画展で構成。企画展は年3～4回実施
- 2階 スタジオ：見学の振り返りや研修、ワークショップなどに利用
- 3階 屋上庭園：休憩やイベントに利用



2階 展示室

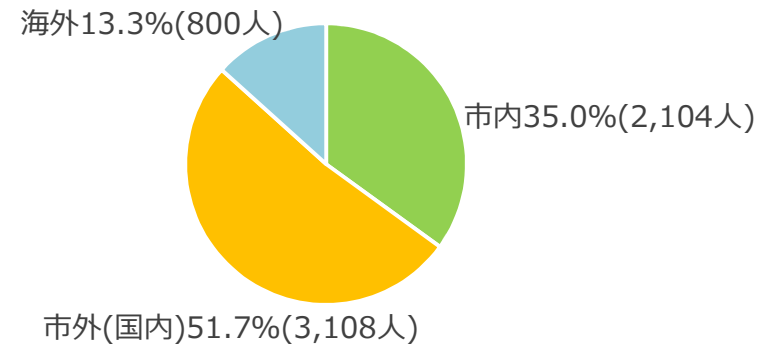
企画展（平成30年度実施分）

企画展名	開催期間
3.11現場の事実×心の真実 結～消防・命のプロが見た東日本大震災	H30.2.6～4.22 (65日間)
写真展 MIYAGI1951 ～米軍医のまなざし、戦後6年の沿岸部～	H30.5.1～8.26 (100日間)
せんだい3.11メモリアル交流館を囲む風土展 #03 竹であそぶ	H30.9.4～H31.1.14 (109日間)
3.11現場の事実×心の真実 それでも、下水は止められない。 ～東日本大震災・南蒲生浄化センターの 知られざる闘い～	H31.1.22～R1.7.7 (167日間)

来館者の状況

累計 約220,000人（月平均約5,100人）が来館
※平成27(2015)年12月の公開から令和元(2019)年6月まで

来館者の居住地 ※平成30(2018)年度に案内の申込みがあった方のみを集計



仙台市の震災遺構

位置付け

津波の脅威や教訓を後世に伝えるため、津波で被災した仙台市立荒浜小学校の校舎と荒浜地区の住宅基礎群を震災遺構として保存

震災遺構 仙台市荒浜地区住宅基礎

津波により被災し残された住宅基礎と浸食された地形の一部を保存。令和元(2019)年8月2日に公開



震災遺構 仙台市立荒浜小学校

当時、児童や教職員、住民ら320人が避難し、2階まで津波が押し寄せた仙台市立荒浜小学校。平成29(2017)年4月30日に公開

校舎外周/1階/2階：校舎の被害状況や被災直後の写真を展示

4階：地震発生から避難、津波の襲来、そして救助されるまでの経過を振り返る写真や映像、災害への備え、荒浜地区の歴史や文化、荒浜小学校の思い出などを展示



校舎外観



1階



4階展示室「3.11荒浜の記憶」

累計

約183,000人(月平均約6,800人)が来館
※平成29(2017)年4月の公開から令和元(2019)年6月まで

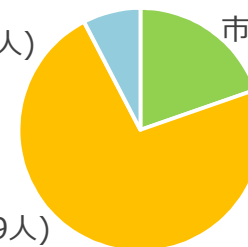
来館者の居住地

※平成30(2018)年度に案内の
申込みがあった方のみを集計

海外7.7%(1,899人)

市内19.7%(4,875人)

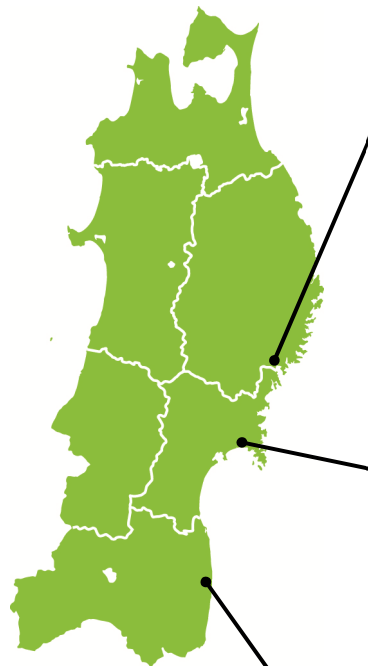
市外(国内)72.6%(17,989人)



他都市における主なメモリアル施設の整備状況 (1/2)

東日本大震災関連

①国と地方公共団体が連携し、3県（岩手・宮城・福島）に復興祈念公園を整備中。公園内（福島県は隣接地）には、伝承施設等も整備予定（平成30年12月末現在）



高田松原津波復興祈念公園

：伝承施設「東日本大震災津波伝承館」の開館に合わせ公園の一部は令和元(2019)年夏に、公園全体は令和3(2021)年度当初に供用予定



有識者委員会資料より

石巻南浜復興祈念公園

：令和2(2020)年度末に公園完成予定。園内の施設における展示は現在検討中



有識者委員会資料より

福島県（双葉・浪江両町）における復興祈念公園

：公園の隣接地に整備する東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設は令和2(2020)年夏に開所予定。公園については検討中



復興祈念公園基本計画より

②宮城県内においては、本市を含む沿岸13市町が、震災遺構や伝承施設等を約30か所整備しており、大部分は令和2(2020)年度末までに完成予定（平成30年3月末現在）

他都市における主なメモリアル施設の整備状況 (2/2)

阪神・淡路大震災関連

①阪神・淡路大震災については、以下の2施設が代表的な伝承施設

人と防災未来センター

：国と兵庫県が出資して設置された国内屈指の規模を持つ施設。
来館者は毎年約50万人に達し、
一般公開が始まった平成14年度から
平成29年度末までに延べ788万人が
訪れた。
伝承のみならず、防災に関する研究
機能も有する。



北淡震災祈念公園野島断層保存館

：地震で出現した野島断層をありのまま保存し、展示する施設



②上記2施設の外、兵庫県内を中心に288基※の震災モニュメントが設置されている

※NPO法人阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」のホームページより

新潟中越地震関連

中越メモリアル回廊推進協議会が主体となり、長岡市、小千谷市、旧川口町（現長岡市）、旧山古志村（現長岡市）に、異なるコンセプトを持つメモリアル施設4か所とメモリアルパーク3か所を整備。「中越メモリアル回廊」を形成。
メモリアル施設4か所の来館者は延べ約8万人（平成29年度）



長岡震災アーカイブセンター
きおくみらい



おぢや震災ミュージアム
そなえ館



川口きずな館



やまこし復興交流館
おらたる

中心部震災メモリアル拠点検討委員会の開催状況

役割

令和2(2020)年度の中心部震災メモリアル拠点の基本構想策定に向けて、検討委員会としての提言をまとめる

委員

委員長	野家 啓一	東北大学 名誉教授
副委員長	本江 正茂	東北大学大学院工学研究科 准教授
委員	植田 今日子	上智大学総合人間科学部 教授
	遠藤 智栄	地域社会デザイン・ラボ 代表
	大泉 大介	株式会社河北新報社 防災・教育室部次長 兼 営業局営業部部次長 兼 営業局業務推進部部次長
	佐藤 翔輔	東北大学災害科学国際研究所 准教授
	佐藤 泰	せんだいメディアテーク 元副館長
	志賀 理江子	写真家
	マリ エリザベス	
	Maly Elizabeth	東北大学災害科学国際研究所 准教授



第2回検討委員会



第3回検討委員会

会議の開催状況

第1回：平成31(2019)年1月30日 第2回：平成31(2019)年3月28日 第3回：令和元(2019)年5月16日

これまでの検討状況

- ・何のために拠点が必要なのか
- ・それを考える上で、東日本大震災はどのような経験だったのか
- ・仙台だからこそ、仙台の特質とは何か
- ・中心部の立ち位置（場所性）はどう考えるべきか

中心部震災メモリアル拠点検討委員会の主な意見 (1/7)

意見の分類

Q. 何のために？

- [1] 過去の犠牲を無駄にせず、世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐために
- [2] あらゆる危機を乗り越えるために
- [3] 都市の未来のために
- [4] 伝承一般

Q. 拠点を考える上での大切な視点は？

- [1] 東日本大震災はどのような経験だったのか？
- [2] 仙台の中心部で展開する意味は何か？
 - (1) 仙台の特質とは何か？
 - (2) 中心部の場所性とは何か？

◎ 議論の進め方

中心部震災メモリアル拠点検討委員会の主な意見 (2/7)

Q. 何のために？

[1] 過去の犠牲を無駄にせず、世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐために

何をしたい (要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
<p>①持続的な動きが必要</p> <p>➢ 何かを作って終わりではなく、持続的な活動を作っていく場にしていくべき</p>	<p>①財源</p> <p>➢ 100年先を見通した安定財源が必要</p> <p>②人や組織</p> <p>➢ 施設の前に、何をするのか考え、それに必要な人を準備し、その人たちと一緒に考えなければ生きた場所は作れない</p> <p>③災害文化</p> <p>➢ 仙台では常識だと思われる独自の災害文化を目に見える形にする拠点（ミュージアムやそれ自体の活動拠点など）ではないか</p> <p>④親から子に継承する遊びの場</p> <p>➢ 周りで子供が遊べるモニュメントが必要。追悼のシンボルでもあり、その由来を通じて親から子に継承する二重の機能を持つ</p> <p>⑤市民行事</p> <p>➢ 施設だけではなく、市民行事にすることが大事</p> <p>⑥音などの体に訴えかける仕組み</p> <p>➢ 体に訴えかける音などで過去の記憶を日常化させ、現在そして未来に重ねる仕組みが良い</p>	<p>①日常的に話題になる機会</p> <p>➢ 相互に語り合うことで記憶が長く続いている状況があると良い</p> <p>②災害をきっかけに生まれる行事</p> <p>➢ 長崎の念仏講 饅頭配りのように100年以上先に結果を残すような行事が作れると良い</p> <p>③反復的な音による記憶の継承</p> <p>➢ 毎日、地震が起きた時間に鐘を鳴らすことで、過去の記憶を日常化させる</p>
<p>②多様な経験／あらゆる人に受け入れられる物語／矛盾と複雑さを受け入れることが必要</p> <p>➢ 市民に開かれ、多様な物語が交錯し、物語を紡ぎ直す場にしていくべき</p> <p>➢ 線引きできないことや矛盾があるのが当たり前な世の中であり、矛盾を大切に、引き受ける場所にしていくべき</p>	<p>①伝えるメディアの扱い方</p> <p>➢ 無数の写真や避難所の張り紙などが呼びかける力はとても大きいですが、実体験を伴わずに被災映像を見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」とどう向き合うかは課題</p> <p>②多様な経験の総体と個々の経験へのアクセス</p> <p>➢ 全ての経験を詳細に見なくとも、それらの総体を感じられ、それから個々の経験にアクセスできることが必要</p> <p>③複雑さを複雑なままに伝える独立したメディア</p> <p>➢ 東日本大震災に特化した独立メディアを作り、編集で分かりやすくするよりも、個人の被災レベルに沿った言葉を選び、複雑さを複雑なままに伝え、どのように信頼を得ていくのか考えるべき</p> <p>④複雑さを保つアーカイブと人や時代に応じたキュレーション</p> <p>➢ 未曾有の出来事の中で、決して1つに括ることができない多様な経験とそこにある矛盾・複雑さを保つアーカイブ、人や時代に応じたキュレーションが必要</p>	<p>①居合わせた人同士が伝え合う</p> <p>➢ 被災経験者が自身の経験を新たな市民に話すなど、その場に居合わせた人同士で経験を伝え合う</p> <p>②写真を前に語り合う</p> <p>➢ 写真洗浄の場で語り合っていたように、見る人・来る人によって記憶が紐解かれ、新たなものになっていく場であってほしい</p>

中心部震災メモリアル拠点検討委員会の主な意見 (3/7)

Q. 何のために？

[2] あらゆる危機を乗り越えるために

何をしたい (要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①市民のアクションにつなげる仕組み ▶ 災害の悲惨さを伝えて終わるのではなく、市民にアクションや個人の実践につなげる工夫が必要	①市民のアクションをつなぐ人材 ▶ 地域課題解決のつなぎ手として各地にあるフューチャーセンターのように、市民の力を防災や検討委員会で議論していることに、つなぐ人材が大事であり、早めの育成が必要	①市民全員が災害の経験を共通の言葉で伝える ▶ 「仙台で起きたこと・伝えたいことは〇〇です」と市民全員がシンプルに伝えるようにする
②防災について学ぶ仕組み ▶ 子どもから大人まで防災教育の機能もあった方がよい	①中心部は防災や災害対応に特化 ▶ 東日本大震災は津波被害が主。被災そのものを伝えることは沿岸部に重点を置き、中心部は防災や災害対応に特化してもよいのではないか	
③東日本大震災に留まらず、これから起こり得る災害や想定外があることを考える仕組み ▶ 今回の震災に留まらず、これから起こり得る災害や想定外があること、それにどう向き合っていくか、災害とともに生きるには何が必要かを考え、発信する	①モニュメントのような象徴的な存在を通じて想像を超える事があることを伝える ▶ 理解できないことがある怖さとは、とても抽象的なこと。モニュメントのような象徴的な存在を通じて伝える作りがあっても良い ②震災を目の当たりにしたことが想像の範囲を広げる経験でもあった ▶ 震災を目の当たりにして、災害だけではなく、戦争やテロなどに対する想像の範囲が広がった	①モニュメントを通じて親から子に伝える ▶ モニュメントの存在を子が親に尋ねることで、親から子にその由来を伝える
④人間としての生きる力を高める仕組み ▶ 人の想定を超えるものが災害ならば、ハードではなく、人間が持つ能力で対応しなければならない。拠点とは市民がそのような人間の能力を身に付けられるところではないか		
⑤自然と人間社会のあり方を考える仕組み ▶ 自然と人間の関係・自分の暮らしのあり方を見つめ直すような場ではないか		

中心部震災メモリアル拠点検討委員会の主な意見 (4/7)

Q. 何のために？

[3] 都市の未来のために

何をしたい (要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①災害文化・アイデンティティを創造する仕組み ➢ 災害の経験を仙台市のアイデンティティとして捉え、災害文化を創り広げていくためのセンターではないか	①災害の経験を整理し続け、世界に共有していく活動の拠点 ➢ 災害文化として、災害で受けた悲しさや不安、その後の状況も含め震災の経験を整理し続け、世界に共有していくような活動の拠点ではないか ②今後の対策を考えるためのネットワークの拠点 ➢ 企業などとのサポートシステムなど、これからの災害対応力を向上させるネットワークの核になれば良い	①災害文化を持つ都市として宣言 ➢ 防災環境都市仙台とずっと謳い続けるならば、防災文化に留まらず、「災害文化を持った都市を作る」という方向性を市民と共有できれば良い

[4] 伝承一般

何をしたい (要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①現場・人・物のセット ➢ 伝えるためには場所・人・物の3つを揃える必要があり、仙台市全体としてその機能をどう備えるか考えることが必要		①人から人に伝える
②アーカイブ ➢ 記録を集めても活用されていない課題がある。何を記録し、何を残すべきかという議論が必要	①組織やコミュニティ、企業を巻き込む ➢ 個人のみならず、組織やコミュニティ、企業における記録活動を支援できると良い ②方法論と極めて長く地道に取り組む覚悟が必要 ➢ 1・2年後に成果を判断するのではなく、100年後・200年後に向けた気の長い作業で、とても大変な作業。方法論を良く考え、技術とノウハウを持っている人たちを集めてやっていくことが大事 ③アーカイブを通じた被災地の連携 ➢ 他被災地の現物やアーカイブについては、現地性を尊重し、奪うのではなく、研究や支援で連携できると良い ④複雑さを保つアーカイブと人や時代に応じたキュレーション (再掲)	
③多くの人を訪れる ➢ 国内外からの来訪者と市民の参画が両立できるものを目指したい	①人が来るための身近な仕掛け ➢ 人々から縁遠い施設になると願う結果は得られない。下世話感やエンタメ感、食、市、市民向け割引など、来場しやすい仕組みも必要 ②子どもが周りで遊べるモニュメント (再掲) ③複数の要素を戦略的に分けて考えること ➢ 象徴的な存在とフローの仕掛け、アーカイブ等の記録を一括りにしてしまわず、戦略的に分けて考えることも必要	①リピーターが訪れている ②市民が外から来た人を案内する ③日常空間として人が集いつつ、特別な日だけ厳粛な空間に包まれる

中心部震災メモリアル拠点検討委員会の主な意見 (5/7)

Q. 拠点を考える上での大切な視点は？

[1] 東日本大震災はどのような経験だったのか？

- 多くの方が犠牲となり、今も2500名以上の方が見つからないという、未曾有の経験。
- 想像を超える出来事で、全ては理解しえない。
- 東日本大震災の全体像には原発事故も含まれ、その取扱いを考えることも必要。

[2] 仙台の中心部で展開する意味は何か？

(1) 仙台の特質とは何か？

- 仙台ならではの機能も追及すべき

背景	コンセプト・手段	実現したいシーン
①東北の拠点 ➢ 東北唯一の政令市として、地の利や都市規模を考えると、東日本大震災の全体像を発信できるのは仙台だけであり、仙台にはそれに応える責任がある	①各施設・団体との連携 ➢ 人々から縁遠い施設になると願う結果は得られない。下世話感やエンタメ感、食、市、市民向け割引など、来場しやすい仕組みも必要 ②アーカイブの展開・連携 ➢ 震災の記憶を記録する大変な作業を、組織的・継続的にできるかもしれない東北唯一の自治体が仙台 ③東日本大震災の全体像発信 ➢ 東北のゲートウェイとして、訪れる人がワンストップで多くの事を感じられるようにすべき ④信頼できる独立メディアの設立 ➢ 利害と関係無く、現実の情報を公平に発信できる独立メディアが必要 ➢ 信頼醸成のため、独立メディアには普段から情報のネットワーク形成に取り組むことが求められ、それができるのが、政治的・経済的都合で押し流されないほどの体力を持つ仙台のようなところだけ	①訪れた人が目的や時間に応じて施設を周る ②信頼性の高い情報の発信 ➢ 今後何か起きた際に、人々は独立メディアに情報を求める ③多様な情報・経験の発信 ➢ 独立したラジオで、抽象度の高い音楽からアーカイブを活用した個別具体的な情報などを積極的に発信する ④反復的な音による記憶の継承 ➢ メディアを通じて震災が起きた時間を毎日音で伝える
②市民力のまち ➢ 仙台には脱スバイクタイヤ運動などの市民協働、市民力のまちという系譜がある	①市民のアクションをつなぐ人材（再掲）	
③繰り返してきた災害の歴史 ➢ 仙台には約30年に1度の頻度で地震が繰り返してきたという固有性がある ➢ 大地震と津波が400年単位で襲来していることを鑑みると、次の400年に向けて考えるぐらいの歴史感覚を念頭に置くべき	①災害文化の拠点 ➢ 神戸は「防災」、中越は「ネットワーク」ならば、仙台は防災の切口だけではなく、「歴史・文化」、「日常生活」の重なりで伝えられるのではないか	①災害文化を持つ都市として宣言（再掲）

中心部震災メモリアル拠点検討委員会の主な意見 (6/7)

Q. 拠点を考える上での大切な視点は？

[2] 仙台の中心部で展開する意味は何か？

(2) 中心部の場所性とは何か？

- 「中心部は現場ではなく、完全に発信に徹する場所」と捉えるか、「中心部も被災の現場であり、沿岸を支える現場でもある」と捉えるか、市中心部の立ち位置には2つの考え方がある

背景	コンセプト・手段	実現したいシーン
<p>①震災当時の被災状況を感じられる現場ではないことを念頭において考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 距離の遠さを理由に沿岸部施設に行かない市民に対して訴求できる可能性があるが、人が来てくれない可能性もある 	<p>①被災そのものを伝えることは沿岸部に</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 東日本大震災は津波被害が主であり、被災そのものを伝えることは現場である沿岸部に重点を置き、中心部は防災や災害対応に特化してもよいのではないか 	
<p>②沿岸部のみならず全てが被災の現場</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ どこまで被災地かと線引きしがちだが、沿岸部のみならず、丘陵部を含め全てが被災地であるという認識でいるべき ➢ 中心部が被災地ではないという視点だと上から目線になる。地理的なハブの役割を果たすと同時に、津波被災地も有するという二重性があり、自身も被災地であるという姿勢を出していくべき 		
<p>③他施設との関係性や活用を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 既存施設や現在市内で検討中の施設等との関係性も含めて検討すべき 		

中心部震災メモリアル拠点検討委員会の主な意見 (7/7)

議論の進め方

① まず先に何をやる場なのか考える

- ▶ 施設が必要か否かを言う前に、まずは何をやるのか考え、それに必要な人を準備する方が大事。
施設が必要ということならば、その人たちと一緒に考えるくらいでなければ、生きた場所は作れない

② 過去の事例に学ぶ

- ▶ 広島の平和記念資料館の展示更新に携わった人から背景や知見を聞くなど、過去の事例に学んでも良いのではないかと

③ 他の被災地に聞く

- ▶ 他の被災地から見て、仙台の拠点に何を求めるのか聞いてみると良いのではないかと

④ 行政的な施設にしないという心構えが必要

- ▶ 予算や人員配置など、行政の仕組みの限界を超える取組みであり、行政施設にしないという心構えが必要

⑤ 早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論を

- ▶ 拠点づくりにあたっては、通常のやり方を超える覚悟を持ち、早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論が出来ればよい

⑥ 拠点の検討と並行してすべきことがある

- ▶ 震災の振り返りや、記録の発表・展示、記録の支援など、震災から10年や拠点づくりにつながることに意識的に取り組むべき

⑦ 行政・メディア・市民・企業のそれぞれが「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ること

- ▶ 脱スパイクタイヤ運動のように、行政・メディア・市民・企業のそれぞれが「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ることができれば、仙台市独自の力を持ったものができるのではないかと

今後のスケジュール

令和元(2019)年

8月3日(土) **市民参加イベント「これからの震災メモリアルを語る」**

9月1日(日) **第4回中心部震災メモリアル拠点検討委員会**

時間 15:00~17:00

会場 せんだいメディアテーク1階オープンスクエア

この回に限り、傍聴の方もご発言いただけます

役割・機能の
検討

10月28日(月) **第5回中心部震災メモリアル拠点検討委員会**

時間 15:00~17:00

会場 未定

11月 **シンポジウム（世界防災フォーラムにて）**

令和2(2020)年

1月~ **第6回・第7回中心部震災メモリアル拠点検討委員会**

具体像（機能）の検討

8月 **第8回中心部震災メモリアル拠点検討委員会**

報告書とりまとめ

令和3(2021)年

3月末まで **パブリックコメントを経て基本構想を策定**

※議論や検討の進行状況等により、全体スケジュールは柔軟に対応